語彙雑考

春日政治

本稿は、去る五月十五日、国語学会創立十周年記念会において試みた講話の概要を書きつづったものである。

一

年来自分のやって来た偏倚した仕事が、とかく語彙の考察に傾き易くて、（そんな事ばかりしていてはいけないのであるが）自然こんな話をもち出したことを許していただきたい。

我等が国語を観察するに、音韻・語彙・語法の部門を立てるのが、一方の常識になっている。この立て方が妥当であるか否かは別として、ともかくこの三つが国語観察の大きな目標となり得ることは認めてよいと思う。然るにこの中で、音韻・語法の二つは、言わば形式の部分であって、比較的観察的帰納の容易な点もあり、研究の歴史の長さにもよろうが、今日相当の進歩を見、漸次科学的体系が取られて来たが、語彙の方に至っては、甚だ漠然としてまだ統一的なまとまりがついていない。随って国語の単語の特質というものが、十分顕揚されていないものを感ずる。実は自分も、国語学上語彙というものを如何に取扱うべきかについて、甚だ定見を欠くものであって、かって或小著に語彙という部門を置きながら只それらを辞書的に並列したに過ぎず、学問上甚だ無味なものを作った失敗の体験を恥じている。国語の観察は、音声や文法の外形と共に、内容たる意義の本質を見ることが、必要であることは言うまでもない。部門の立て方はどうでもよい

が、音声の結合によって始めて意義をもつ単語を、意義論の領域に持ちこんで、国語の意義の本質というようなものを見ることは出来ないだろうかという空想を、折にふれてもつものである。しかしそれはなかなかの難事業であろうから、今は問題に止めて、今日ここに述べようと思うことは、只自分が平生多少趣味をもってやり来り、又それが或空想によって試みつつある、一種「語彙の瓢箪」とでもいうべきものについてである。

二

第一は古資料の探求である。これは一面辞書的観察に属したものである。辞書は文献又は口頭の語彙のあるだけを集めるのが、その役目になっているが、又特殊な文献や方言などに隠れていて、辞書に見えない資料を、偶々は掘出すこともあり得る筈であり、已に知られている語でも、その語義や語形が更に明かになり、時には従来考えていた語義語形の誤を正したり、補ったりすることの出来る場合もある。これは自然科学の研究者が、古い生物の化石を求め、新しい種を見出して喜ぶのと同じく、発見的興味ともいうべきものをもつ仕事であって、自分は今も尚相当面白いことのように感じている。

こうして求める語彙は、数も少いし、とかく散漫になり易いもののように考えられるが、元来言語が切れ切れの集まりではないから、発見された語彙は、既知の他の語彙と大抵関係はつくものであり、時には或一語の発見された為に、他の研究の思わざる助けとなり、疑わしかった問題を解決してくれることさえあるのである。一二の例をあげるか、ソダタクという語は、従来古事記の歌に一つ見えるのみで、従ってその意義が不明であったが、偶々仏典に於て「刮」の字をソダタクと訓んだのを見出した為に、撫摩する義であることが明かになって、従来考え試みていた諸説が雲散してしまった。モユもモヤスも既知の語彙ではあるが、「息」の字をモユ、「税」の字や「沃」の字をモヤスと読んであるのを見出すとモユには利息のつく義もあり、モヤスには税を課する義にも、田を肥やす義にも言われたことが知られて、語義の補足が

出来た。従来四段活用であると思っていたヨロコブという動詞が、奈良時代の仮名遣や訓点物の読方から、古くは上二段に活用したことが発見されて、万葉集の「待歓」をマチヨロコベルと読んだのも、続紀宣命の「歓流自」をヨロコバシムルシと読んだのも誤であって、マチヨロコブル・ヨロコブルシと改訓しなければならなくなった。故大矢博士は訓点に「壌」の字をコマヤクともコマグツとも読んでいることから、「壌」の字と共通義をもった「肥」の字が、ニの助詞を取ってコマヤカニと読まれたろうことを推定して、万葉集の「肥人」をコマビトと読んだ旧訓の故あることを立証された。このコマヤクやコマグツも漸くこの頃の辞書に入れられた語である。自分はつい先頃ヤワフ（攘）という動詞に気づいて（この語は新撰字鏡や石山寺本法華経玄賛の訓に見えている語であるが、普通の辞書に出ていない）ヤワシ（飢）という形容詞と同根であろうことに思い及んで、種種の考察に導き得たことがあるが、それに関しては後に述べることにする。

早く死んで過去帳にも記されていないような言語は無用なようにも考えられるが、国語の研究には、それらをも遺漏なく探求することが肝要であり、またそれが興味深いことである。

三

次は語彙の構成に関する特質である。自分は、音義関係の直接な言語、即ち原始言語ともいうべきものの観察にも亦興味を感ずるものである。即ち擬声語・感動詞・象徴（擬態）語の如きを指すのであって、こうした言語が案外国語の特性を表すものではないかという考えからである。しかもこれらの古代語形について、考えて見たかったのである。これは自分の旧稿「奈良朝人の擬声語」などに述べたことであるが、こうした種類の語彙には、構成上の或特質をば大凡そながら摑み得ると思う。自分のこの観察で得たことは、これらの語には㈠母音の同化したものが主要をなしていること、㈡ラ行の接尾音のつくことの著しいことであった。この事は国語の単語の一般に行われている現著な一特質であることを思う。

ウラル・アルタイ語族には母音諧調という特性のあることが指摘されるが、日本語の母音同化はそれの極めて単純化されたものであって、それは今日までも続いていると信ずるものである。国語の母音同化については、かつて福岡の国語学会で話したことがあり、こちらへも報告したことがあるから、ここには省略することにする。(ニ)の語彙の尾にラ行音のつくことの多いのも、国語の現著な一特徴と思う。このラ行音は所謂接尾音というべきものであるが、活用語に入って活用語尾となるものが多い。仮に国語を品詞別によって見ても、名詞には古くロがつきラがつき、代名詞では人・事物に必ずレをもち、場所・方向にもラのつくことがある。動詞の活用語尾を見ると、四段ではラ行活用が数に於て最も多く、下二段にも相当ある。存在動詞アリのラ行活用なるはもとより、この語の融合して生ずるラ行語尾の語が相当多い。又四段・ラ変以外のすべての活用が、ル・レをつけて用法を補うことは通則である。形容詞の連用形が詠歎的にロをもつことは古習であったが、語幹にラ・ラカのついた情態言があり、語幹にルをつけて直ちに四段動詞となるものもかなりある。助動詞に於てはル・ラルを始め、アリの派生語が皆リ語尾であり、数の多いは言うまでもない。助詞にはさして多いとも言われないが、尚ヨリ・カラ・スラ・バカリ・ナガラ・ロなどが見える。かくて語末にラ行音の多いこともたしかに国語の一特質といってよいであろう。

今(一)・(二)をあわせて、ちょっとした簡単な例をあげる。futi（縁）と語根を同一にしたと考えられる fata（端）は母音同化をし、fotori（辺）は母音同化をして、更に接尾音ラをもったものである。kuti（口）から分化したらしい koto(言)は母音同化をし、kataru（語る）は母音同化をしている上に、ラ行活用を取ったものである。魚の名の sibi（鮪）と saba（鯖）とは、いずれも同子音をもち、共に母音同化をした語であって、同類の魚を呼んだものらしい。然るに一方、sifira（鰆）・safara（鰆）があって、そのシヒとサハとは同じく同子音をもって母音同化をなし、恰もシビ・サバに対応すべきものであるが、その尾にラ音がついている。（コヒ・タヒ・エヒなど語末のヒになった魚類があるが、このヒはヒレ(鰭)のヒと同根で魚類を表すものの如く、而してシヒラのヒ、サハラのハはそのヒと同じものらしい。従ってシビのビ、サバ

のバはその有声化したものと考えられる）

これらは如何にも都合のよい例ばかりであるが、勿論国語がこんな語ばかりで成立っているとはいえないが、ともかく国語には母音の同化した語彙が相当あり、又語末にラ行接尾音をもったものが相当あり、殊にそれが同類義の語の派生しゆく際に、この性質を出して来ることがこの例によってわかると思う。従ってこの特性を予想しておくと、逆に或語の語源を考えたり、又は同語根から種々に分化した同類語に気づいたりする上に、ことの外役立つことが多いのである。

四

第三は語根に関する問題である。日本の音義派・言霊派などいう人々のやり方に於ては、至らない所があったにせよ、言語の本質たる音義の関係ということは誰しも知りたいことである。今少し合理的に所謂語根という如きものを推定し得るなら、それも試みたい一つである。少くも同類の音声が表す同類の意義の語があったとしたら、それら一群から、共通の音声とこれに対応する意義とを帰納し得るのではないかと思う。自分は語彙を取扱っている間に、屢〻そうしたことを考えさせられるのである。

たとえば、先にあげたフチ・ハタ・ホトリの如きについても、f・t の子音をもって、その類似義を有する語は他にも考えられると思う。ハタテのハタ、或はヘタの如き、ハテは無論のこと、動詞ハツ・ハタスも同族であろう。かくて極限をいう義から推すと、ハツ(初)・ハツ(裔)などもその分化らしく、ホトホト・フツニなどもそうではないかと思う。ハタルという動詞は、金を債ることや徴(催促)することに用いるが、いずれも期限をきることから出ているとも考えられるのである。

これはかって書いたことがあるが（古訓漫談）「防」の字の訓にホソグとつけたものが、平安初期には多い。フセグはフサグと関係があり、ホソグはホソシを連想させて、これらは物の間を狭小にする義だろうと考えた。かくてハサム・ヒ

シグも同一語根から出ていることを感じ、ハサマ・ハシ（著・箸）・ハシ（間・端）・ハシ（橋・梯）・ヒシ（菱）・フシ（節）をも同根と推定し、更に「閉」の字をヒソグと読んだものを見つけて、無論同類であり、ひいてヒソカ・ヒソムなどいう語も同族と考えることが出来た。これらはf・sの子音を根として出来ている一類であって、皆共通の音義関係を認め得る。而してこのfという両唇音とsという舌先音とは、物の間を狭めるリンギュアル・ジェスチュアではないかと考えて見たのである。

さて前にあげたヤワフ（攫）についてであるが、この語は一見して誰にもヤワシ（飢）に結びつけられるものである。自分は先ず動詞ヤワフの語末には、動詞の所謂継続形をつくる「アふ」のついた形を連想し、形容詞ヤワシの語末には、動詞を形容詞化する為の「アし」のついた形を連想した。共に情態を表す語形であるなと思った。元来ヤス（瘠）にはjの子音をもち、ウウ（飢）にはwの子音をもつ。（古くはウェはェとのみ言って通じたのを見ると、語頭のウはwの伴随音が発達したものらしい）「弱」の語幹は普通ヨワであるが、大宝の戸籍帳の人名には、「弱」の字をヤワと読んだのがあって、ここのヤワフ・ヤワシの語幹と同根らしい。そこでヨワ・ヤワはjとwとを合せた子音をもっていて、「瘠」や「飢」と同じき軟弱性を表したものらしいが、そのヤワ或はヤウ jawu（想定語）などから、一方を動詞の継続形とし、他方は形容詞化して、その義を分化させたものだろうかと考えて見た。一方タワヤメ・タヲヤメの如き場合は、子音を上下互換してw・jとしたものであるが、亦同根と見るべきであって、従ってヲユ・ヲヤス（痩）なども亦同一族と解されるのである。かかる事は無論先輩の或人が考え来った所ではあるが、類音類義の語を集めて、今少し合理的に帰納することは、或度まで可能ではないかと、大それた考をいだくのである。

以上自分が国語の語彙についてもっている空想の一端を話して見たのであるが、果してどの程度まで真を保ち得るか、切に諸賢の高教を乞う次第である。

——九州大学名誉教授・文学博士——